

さって来てあまり滑らなくなり、降りるのに苦勞するほどになる。

やがて水音が聞こえてきた。「もしや？」と思って近づいてみると、やはり虹吹沢合流点の虹吹ノ滝が現われているのではないか。さらに、ここから先にも水の流れが現われている所があったので、この合流点でスキーをザックにつけ、歩くことにした。

魚止滝も現われていて、左岸を捲いて下降していくと、下追流沢出合で沢の雪がなくなり、とうとうと水が流れ出すようになった。左岸の急斜面を苦勞して登り、下追流沢に降りる。この沢も出合までは雪に埋まっていた。

出合から巻岩山へ続く尾根に取り付く。900m近い登り返しをやって、三時間半程かかって巻岩山山頂に立った。

苦勞して登った高度も、ここからは駿川山荘に向けて沢ぞいにグリセードで滑り降りれば、アッという間であった。あとは弥平四郎まで歩き、この山行を終えた。

追記：今年は豪雪で、下追流沢出合まで下降することができましたが、例年ならば虹吹沢出合あたりまでと思われます。そうなると切合小屋へ登るしかなく、2日でこの沢の滑降はまず無理と思われます。スキー滑降のみを楽しむならば、飯豊本山から虹吹沢を滑るコースをすすめますが、滑った高度を登り返すことを覚悟しなければならぬと思ひます。

## 4. 阿武隈川源流 南沢左俣と白水沢右俣

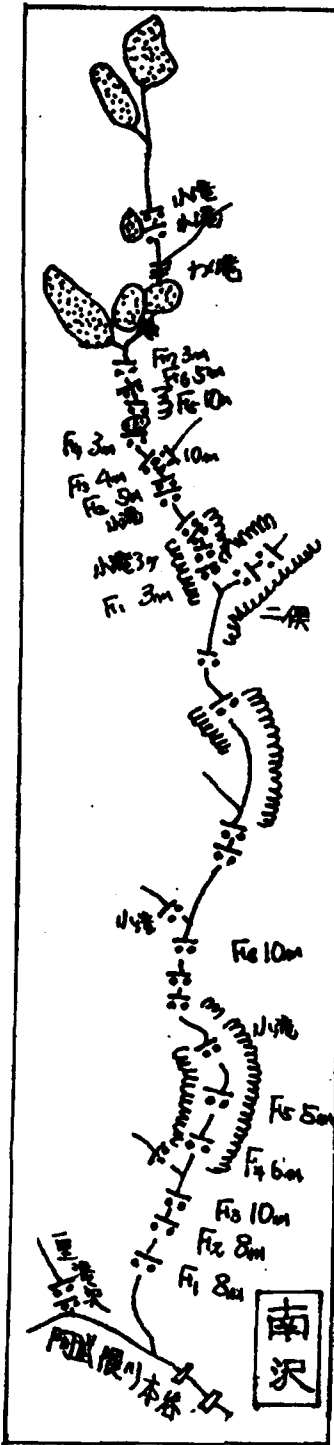
阿武隈川源流には興味をひく沢が何本もある。我々の会がこの地域の沢に初めて入ったのは、1977年のことである。その後、この地域には何回も出かけ、多くの沢を登ってきた(それらの遊記記録は、会報 725 のNo 6, 8, 19参照)。1984年も、この地域で新しく2本の沢に入った。以下、その時の記録を紹介する。

南沢左俣

1984年6月2日

L

甲子温泉脇の、今は荒廃した林道を少し進み、阿武隈川本谷に下る。ワラジをつけて少し下ると、一里滝沢出合。南沢の出合はこのすぐ下だ。



南沢に入ると滝が次々に出てきた。まずはF. 8m。右側を直登し、ザイルを出して後続の二人を確保する。続くF. 8mも右を直登して、後続の確保にあたった。F. 10mは、手前にスノーブリッジがあり、これを渡って右より降りた。F. 6mは直登し、次のF. 5mは、左側をトラバース気味に登る。F. 10mを簡単に越えてしばらく歩いた所でようやく二俣となった。

二俣から予定通り左俣に入る。すぐゴルジュ状となって、F. 3mがかかり、直登する。この先小滝がいくつもかかるが、そう苦勞することもなく通過してゆく。

F. 4mを越えるとスノーブリッジが出てきた。下に滝が見えていたが、スノーブリッジ上を通過する。やがてF. 10m。中間から取り付こうとしたが、ザイルなしではちょっと不安があり、左岸を小さく捲いて上に出、ザイルを出して後続の2人には直登させた。F.でも後続の確保にあたる。

ナメや小滝を越えていくと、やがて沢は雪渓で埋まり、ずっと雪の上を歩くようになる。後続の登山道めざして登るが、登山道まではかなりの距離があった。

(記：)

[タイム] 甲子温泉(6:20)→南沢出合(6:50)→二俣 (9:35)→沢終了(11:40)→登山道(12:40)→甲子山(13:00)→甲子温泉(14:40)

白水沢右俣

1984年6月2日  
L

甲子温泉手続の道路脇に車をデポし、南沢に入る矢戸・兼子・佐藤の3人と分かれて白水沢に向かう。

旅館の前を通り少し下って本谷を渡ると、白水沢F.が見えてきた。F.手前で右岸の岩が崩れてしまっていて、F.に直接取り付けず、手前の小滝の下に降り、小滝を越えてから右岸に取り付く。本格的に沢に取り組むのは